

June 19, 1987

PART FOUR. 神経ネットワーク調査の旅.

バークレイ再び.

2月16日17:00発、ユナイテッド航空(UA)便サンフランシスコ行き.

わずか数ヵ月前にUAには乗るまいと誓った人が、運賃の安さには勝てず再びUAに乗ることとなった。今回は前回の非礼を知っているらしく、厚遇である。エコノミークラスが満席ということで、ビジネスクラスに回してくれた。席の前後、巾は広く、サービスも良い、洗面セットまでくれる。これに比べるとエコノミークラスはおそまつ、目的地に着く頃にはロブスターみたいに腰が曲がって動かなくなってしまう。エコノミーに乗っている人たちも黒人、アジア系が主である。日本は豊かになったとは言え、エコノミーに喜んで乗っているようではまだまだである。

さわやかに飛行は続き夜明けである。三度目のサンフランシスコ空港は感動がなさそうだと思っていたが、“飛行機はあと45分でサンフランシスコに到着します”という放送があると“ジーン”と来る。サンフランシスコという言葉がわたしの中で特別な響きを持っているらしい。

5年ぶりのサンフランシスコはご挨拶であった。バークレイ1泊なので大荷物は空港のロッカーに入れようと思っていたら、テロ防止のため荷物の越夜は許されなくなったのだそうだ。大きな荷物をひきずり、中位のバッグを肩にかけての出発となった。空港からバスでサンフランシスコ市内へ。サンフランシスコのバス停はユニオンスクエアのそばで、昔のカンがよみがえり、すぐユニオンスクエアにたどりつけた。さすがと感心したとたん、私の中でサンフランシスコ地図が誤っていることに気付く。ユニオンスクエアとケーブルカーストップは隣合っていると思っていたら、この間がかなりある。人間はグルーピングを行って認識を行うという話があるが、私の中でこれらがグルーピングされていたことになる。

大荷物はバート(地下鉄)のロッカーに入れてサンフランシスコのフィッシャーマンズワーフへ行こうと思ったがロッカーはいっぱい。しょうがないのでバートでバークレイに向かう。

カリフォルニア大学バークレイ校はカリフォルニアの丘の中腹に有り、宿泊所は山の上の方である。ハンフリーゴーバートというバスで山を登り宿にたどりつこうと思ったら、バスが来ない。女子学生に聞いたら今日は休日だから来ないんじゃないという。今日は月曜日なのになぜ?と思いつつ大荷物をひきずり、丘を登る。眠いし、頭はモーローとして来る。あとで今日は大統領の日と分かる。まったくついてない出だしであった。

久々のバークレーは？

バークレーへ行ったら“ナツカシー”と思うだろうと思って行ったのであるが、現実とは全然違った。驚いたことに昨日までバークレーにいたという錯覚に襲われる。

この4年間ですっかり消えてしまう。この4年間に無理やり思い出さないと確認できないくらい私の中で4年前とつながる。不思議な感覚である。記憶喪失していたような感じで、ある種の快感である。

木の蔭から藤原さんや奥田さんが出て来そうな気になる。バークレーが5年間あまり変わっていないということなのかもしれない。ベイエリア（サンフランシスコ、バークレー付近）の空気は独特である。気温は低く乾燥しているが、日本の冬のような不快感はなく、さわやかである。目隠しして連れていかれて、ここはどこかと聞かれても、100%ベイエリアと分かる。バークレー校のキャンパスには桃と私の好きなナイルのユリがさいていた。

2月17日

今日は忙しい、9：30から昔の英語の先生ミセス・レラに会う。彼女とは家族ぐるみで付き合っていたので、家族の話やその後について話に花が咲く。円高になったらすぐにでも日本へ行こうと思っているというので、その時は忘れずに連絡してくださいといったら、あなたの名前は名簿の一番最初に書いてありますから必ず連絡しますとのことで私を喜ばす。アメリカ人は人を喜ばすのがうまいが、彼女は私の英語がうまくなったという。十分おせじであるが、このところ私も英語が実に良く聞けるので驚いている。10：00から次の人に会わねばならぬ、心のこりながら Sea you！ 10：00からフリーマン教授を訪ねる。この人は動物学者で、動物の認識を研究している。私とは全く分野が違うのだが、国費でバークレーへ行く以上何か仕事をしなくてはならない。重い気を引きずりながらやむをえず訪問して、研究の話を伺う。研究室には犬を飼っていて、入ろうとするとワンワンと英語で襲って来る。先生が戻れという机の下に戻る。日本人は醤油くさいというので、醤油ずきの犬だと味付け肉になるなと思ったが、犬君幸い醤油に興味を示さなかった。動物学者は、計算機学者とキャラクターが異なり実に温かい感じの人であった。もっとも私は彼の動物学的観察を受けることとなってしまったのだが。11：00、1982年当時、私の受け入れ教授であったデスパインに会い最近の様子などを聞き昼食を取って2：00発シャトルバスでサンフランシスコ空港へ。ああ忙し。

最後に2、3バークレー報告を加えると、

1. ハンフリーゴバートが白い大型バスに変わっていた。
2. 学生の衣類が少し良くなった。
3. ウェストサークル近くにビルを建ている。

15：00発ロスアンジェルス行きに乗る。

パサデナへ

ロスアンジェルスはただ広くて間のぬけた町である。本日の目的地はパサデナ。ロスアンジェルス空港で待つこと1時間、やっと来たスーパーシャトルという小型バスに乗り1時間、パサデナに付く。日本でいえば筑波か？これが雲助運転手で、\$11のところ\$17とられた。

ホテルはホリデーイン、まあ中位の感じである。日本人の団体に一步遅れてフロントへ。添乗員の女性から「出て来ないで下さい」とまるで牛でも扱うかのように言われて後の集団に入ろうかと思ったが、私は団体のメンバーではない。添乗員の英語はなるほど達者であるがこういう人に引率されるのではみじめな感じである。

もっともこの団体には新婚さんが何組かいるのだが、男性が女性に肩を組み、だらしなくもたれかかって歩いているのを見ると猿が抱きついているように見られたものではない。日本人は元々、かっこうが悪いのだから態度はりりしくなくてはいかんと痛感。

アメリカで感じの悪い日本人に日本人相手の土産店の女性がいる。この人達は全く日本人をバカにしきった感じである。入らなければよいのにニューヨークでその様な店に入り案の定、不快になり買わずに出た。日本人ずれしているアメリカの店員も考えものだ。ニューヨークの五番街、（日本でいえば銀座の真ん中）の大きな電気店に入ったら変な店員が来て“スケベあるよ”といって店の一角のポルノビデオコーナーへ連れていこうとする。ここは五番街、アメリカ人も多勢いるのにそんなところにノコノコ行くのは破聯恥だ。“けっこうです”とりりしく断ったら、“信じられない”といってあきれられた。もちろん後悔はない。私は目が悪いがこういうときだけはかなり遠くまで見え、あまり内容がないことを見抜いているのだから。

#### 神経回路網の研究会。

ジェット推進研究所（JPL）

19日8：00～20日夕方まで神経回路網の研究会である。

神経回路網とは簡単にいうと人間の脳と同じ構造の計算機を作る研究の会議である。最近米国防省からこの分野に予算が付き、活発な研究が行われだした。例によって日本も“追随しなくては”ということになり私が現状調査におもむくことになったしだいである。すなわちこの会議が本渡米の主目的である。本会議に関する詳細な報告書は日本国政府に提出済みである。もっともさほど秘密度の高いものではないので希望者にはお見せできます。

ここでは会議内容にはふれず、会議中で最も印象的だったことを記すことにしよう。20日昼休みにJPLの紹介映画が上映された。JPLはNASAの上部の団体になるため、映画ではJPLとNASAの輝かしい歴史と研究内容が紹介された。

JPLはジェットエンジンを開発するためにドイツのフォンブラウン博士を招い

て研究を開始したということから始まり、最近のNASAまで紹介が行われる。NASAについては述べるまではあるまい。世界の宇宙開発をリードして来た総本山である。JPLのような研究スタイルをミッションオリエンテッドといい未知の大目標を定め、これを開拓していくものである。映画の内容はアメリカの最も輝かしい分野を示すもので、誇りに満ちている。これに比べると我が電総研の紹介はさびしい限りである。どれも日本最初とか、改良成果というようなものが主で、未知の分野の開拓なんてあるだろうか。これでも日本ではいい線にいつていることになっている研究所なのだから問題である。

JPLの映画を見ていると“新らしいこと以外は下らぬことだ”という考え方が彼等の中に育って来ることがよくわかる。私は長いこと疑問に思っていたアメリカ人の性格の一つが分かったような気がする。これは第3部で述べたようにアメリカでは評価の定まらぬ新らしい計算機が売れることである。全体のバランスの良さよりも、一つ新らしい試みの有る計算機が売れるのである。これがわからなかったが、やっとわかった気がする。いつも未知を求めて追って来た人にとっては新らしい試みのみが価値があり、面白いものであり、自慢の種なのである。いつも新らしいことばかり考えていると、新らしさに敏感になって真に新らしいもの以外は価値なしと思えてくるのであろう。

カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）。

20日、18:00 ロスアンジェルス発サンディエゴ行き約20人乗りプロペラ機は、フラフラと滑走路を離れた。ロスアンジェルスの夜景はすごい。金、銀をぎっしりと散りばめたようにオレンジ色に輝く。こんなに化石燃料を消費してよく使いつくさないものだと思う。フラフラフラと風にあおられ心配したが、それにもまさる睡魔でぐっすりねこむ。

サンディエゴ

クオリティインに泊まり翌日カリフォルニア大学サンディエゴ校へ。パークレーの弟分である。サンディエゴはのどかである。黒人は非常に少ない。多分アメリカで黒人がもっとも少ないのではなかろうかとさえ見える。メキシカンが多いというが、ロスアンジェルスに比べて少ないように思える。私には米国で最も安全な町に思えた。

UCSDでは電総研から留学中の石川氏にお世話になり、今をときめくランメルハート教授に会う。この人は“並列分散処理（PDP）”という一学問分野を確立しつつある人で約40歳、心理学出身なのでどことなく優しい感じである。私達も数年前PDP関連への進出を考えたことがあったが、暗闇にしか見えず退散した。

この教授はそこに光をともした。教授と最近の研究について話していると、私には暗闇にしか見えないところに光が見える。先生は真っ暗やみの中をたいまつをつ

けて人々を導いていく感じである。感動である。世界中に何人もいない人はやはり輝いている。私もこんな人の下にいたらもう少し進めたらう等と感ずる。この先生7月からスタンフォード大学に移る。世界中から優秀な人がアメリカに引きぬかれ、その中で最も優秀な人がスタンフォードに引きぬかれる。アメリカの中のアメリカを見る思いがする。

20日 石川家泊。疲労のせいか体調が悪い。石川家で雑炊を作ってもらい安らかにねむれたので再び体調を戻し出発。

東へ。

5年前の留学時に課せなかった東部への旅が実現することになった。事有るたびに東部へつれていかなかったことに不満を言う奥様のまなざしとお言葉を思いうかべながらいざ出発

ボストン。

2月20日(土) サンディエゴ9:50発シカゴ経由ボストン着17:00。

ボストンからタクシーでパークプラザホテルへ。はじめての東部である。

最初の驚きはタクシーの運転席と客席を隔てるアクリル板である。運転手とのやりとりは10cm程度の小窓で行う。西部や南部でタクシーに何度か乗っているが、こんなに完全遮蔽したところはない。ホテルではドアが見たことのない構造で、ドアに洗濯物を出すための小窓があり、そこに洗濯物を入れ又そこをロックするようになっている。物騒なところと思うほかはない。私の好きな自由もつまるところが、これかと思うと残念な気がする。

2月21日

午前中、ヒストリカルトレイルというボストンの歴史道路を歩く。茶会事件のために集合した教会やポールリビアの家などがきれいに保存されている。抵抗の歴史である。自由のための戦いの声が聞こえるような感じがする。

ボストンは日本の京都にたとえられるが、日本の萩といった方が良いと思う。日本語案内書が歴史的な話をよく書いてないのは残念である。茶会事件ぐらいは知っているが其の他はよくわからない。たとえば、ポールリビアは、米で人気のある人で、馬で何かを伝えたことで有名ならしいということは、ポールリビアの家の案内板からわかるのであるが、どんなことを伝えたのかわからない。外国の都市ごとの歴史文化を書いた書物がほしいと思った。

ホテルはボストンコモンという公園(広場)に面している。ホテルの1階にシーフード屋があり、ロブスターが食えるが、この店で予約してから食べられるまでは1時間かかる。ロブスター料理には>のような形の甲こわしとビニールが付いて来た。ウェイトレスにロブスターの食べ方を教わる。ビニールはエプロンであった。味は跳び上がるほどはうまくない。かたくて消化が悪そう、カニのほうかうまいと思う。

2月22日(月)

ボストン(公式)訪問の目的マサチューセッツ工科大学(MIT)。

地下鉄でMITへ。メディアラボでコネクションマシン見学。コネクションマシンとは小さな計算機を約64000個結合したものである。最初とても売れそうもないと思ったが商品化され何か所かに納入されている。一つの驚きである。午後コンピュータラボを訪ね、私の所へ5月に来る予定のギフォード教授および数年前、当所へ1年間来ていたモニカに会う。

2月23日(火)

午前中、ボストン美術館へいき、帰りにブルデンシャルセンターの展望台へのぼる。ボストン美術館はたいしたことはない。モネが目につく。日本の美術品も多いがあまり良いもののようには思えない。展望台は英語でオブ・ザ・バージョンといい、ボストンを一望できる。チャールズ川を中心に案内の地図のとおりである。チャールズ川は氷と雪で真っ白で町並みはレンガづくり、と大変美しい。ヨーロッパの中世の町を思わせる。しかし、道にはごみがたくさん落ちていてきたない。夜明けの銀座裏通りのようだ。マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学が紛らわしいことにケンブリッジという場所に有る。

ニューヨーク、ニューヨーク。

2月24日夕方HOTEL 着。

大変美しい。数々の物語を秘めたブルックリンブリッジ。

そして自由の女神。自由の女神は大きいといえば大きい、予想より小さいと言えば小さい。ハーレムは死んだように静まり返った所と思っていたら黒人たちがたいそう元気に歩いていて活気が有る。メトロポリタン美術館。モネとルノアールが印象的であった。

2月26日

こぶる体調悪し。何も食べる気がしない。朝からホテルの地下の売店で菓子パンとジュースと牛乳を買い、飢えをしのぐ。学会で4件聞くがあるのでそれにだけ

行くことになっている。あまりまいっているので夜の部はキャンセルしようかと考えたが、無理して出席。夕食は日本食の雑炊が食べられるところにしてもらう。

ブロードウェイミュージカル“Me and my girl”劇場は狭く500人ぐらいの大きさである。席はかなり良い。軽快な音楽がはじまる。歪の大きいスピーカーだなどと思ったら、生演奏だった。ホールの歪が大きいのかCDばかりきいているので私の耳がオーディオになじんでしまったのか?。ミュージカルの物語は貧乏人が、突然

金持ちの後とりとわかり、上流社会は加わるドタバタである。この様にまじめに見てしまうと下らないが、ミュージカルの信じようは楽しさである。楽しければすべてよしである。美しい照明、楽しい歌と踊り、タップダンス、笑い。それだけあれば十分である。楽しい、ただ、ただ楽しい。これしか表現のしようがない。これがニューヨークである。

## カルチャー・ショック

そこでクイズを出すことにする。次の時刻にあることが起こりました。果たしてなにか起こったのでしょうか。2月27日の0:30、3:30、7:30、8:30、17:45、18:45、2月28日の0:30、8:15、私の室は一泊\$150もするのに(NYでは安い)隣の室と鉄の扉でつながっていて、大きな声なら話の内容が聞き取れます。そこで答えは、隣のカップルの愛です。1日半に私が

おわりに

早3ヵ月がすぎた。遅くなると感動が消えるからと思いつつ報告会、年度末、年度始めの雑用に追われた。予想通り日々がたつと興奮もうすれ、情熱の薄いメモ文になってしまった。月日経って思い知らされるのはテレビコマーシャルにニューヨークがよく出ることぐらいであろうか。

2月中旬153円だったドルは130円台に近づいた。日米貿易問題は我々と関係の深い半導体で火をふいた。政府はあいまいな計画を示し、業界はその間に合理化を進め生産性を上げ円高でもやっていけるよう企業努力をした。その結果、米国の赤字は減らず円高の悪循環に入った。馬車馬のように勉強する学校の体質が企業の発展を生み、ここまで来た。あの受験体質はエスカレートして留まるところを知らぬのかと寒気を感じていたらどうやらここで壁にぶつかった。やっと個人の人生を楽しむ時代が来るように見える。かげながらアメリカのいじめに声援を送っている。農産物自由化の次に、日本人が毎日わらじのようなステーキを食べないのはけしからんと、言ってくるのを心配しつつも。      B Y E !